佛教大学社会福祉学部論集　第 11 号（2015 年 3 月）

対人援助者に求められる援助観

―― 乳児保育における熟練保育士の語りの分析を通して ――

白　井　はる奈　・　林　　悠　子

〔抄　録〕

本研究は，対人援助者が大切にしなければならないことを見出すことを目的とし，乳児保育に携わる熟練保育士の保育観をインタビューにより探索した。ひとを援助する上で，まず，【相手への思い】があり，行動指針としての【関わり方】を心にとめ，【具体的な方法】を実践していく，というプロセスがあった。【保育の質向上を支えるもの】として，知識を得るための研修会への参加だけでなく，保育を語り合い，尊重しあえる上司や同僚といった仲間の存在や，保育士自身が家族や恩師に大切にされた経験も大変大きいことが明らかになった。職場のスタッフ全員が「より良い保育をしたいという思い」を持ち，お互いを認め合い，学び合うことで，保育が「こなさなければならない“業務”」ではなく，保育士自身も主体となって，「やりがいのある“援助”」ができ，保育を楽しむことができ，また成長し続けられると考える。

キーワード：対人援助，保育，語り

1. は　じ　め　に

本研究の目的は，熟練保育士の保育観をインタビューにより明らかにし，対人援助者が大切にしなければならないことを見出すことにある。

筆者は A 保育園に関わる一保護者として，A 保育園に勤務する熟練保育士たちの保育に大変感銘を受けた。その保育士たちの保育には，複数の保護者が「丁寧な保育をして下さっている」と認識している。その対人援助の姿勢を明らかにすることで，他の保育士や他の対人援助職の援助のあり方の向上に貢献できると考え本研究を行った。

林[1)]は，現在，保育の量的拡充に向けた施策が打ち出されているが，保育の質保障にとってはきわめて危機的な状況であるとしている。諏訪[2)]は，3 歳児未満保育における「保育の質」を捉える指標を 6 層（「社会・文化システム」，「保育の外部システム」，「保育体制」，「保育方法・形態」，「保育目標・内容」，「保育者のあり方」）に整理し，第 6 層の「保育者のあり方」

は保育の質の中核的要素をなすとしている。さらに，「保育の質」の概念図の中軸に「保育者意識」をおいている。鈴木[3]は，「保育の質」は「保育者の質」に負うところが大きく，保育者自身が，より良質な保育を意識することが重要であると述べている。以上のことから，熟練保育士の「保育者意識」すなわち「保育観」を明らかにすることは，保育の質を高めることに貢献すると考える。

秋田ら[4]は，保育の質が，子どもの生活経験の保障として重要であり，大規模研究は政策形成のエビデンスとして不可欠であるが，それが卓越したモデルや日本の向かうべき保育のモデルを示すとは限らないと指摘し，質的事例研究の必要性を説いている。本研究では，A 保育園の熟練保育士という，特定の少数事例ではあるが，保護者の目から熟練と感じる保育士の生の声を，保護者として聴くことにオリジナリティがあると考える。筆者が保護者であるということによって，送迎時に保育場面を垣間見ること，また保育士の先生方とのコミュニケーションや日々の連絡ノートは，関与観察のデータになっているともいえ，保育士の語る言葉が机上の理想論ではなく，事実であることを証明する根拠となり得るからである。また本研究の結果から，保育の領域のみならず，その他の対人援助職の質向上への知見（人を援助する際に大切な共通する概念）も得られると考える。

なお，本研究は，佛教大学「人を対象とする研究」倫理審査委員会で承認（承認番号 H26-12）を得て行われた。

2. 方　　法

研究協力者は，複数の保護者が熟練だと感じる A 保育園の保育士 5 名，保育士経験は平均 18.8 年目（9～35 年目）で，全員女性である。A 保育園は，0（産休明け）～2 歳児の乳児の保育を行う，定員 40 名の保育園である。筆頭筆者と研究協力者は，保護者と保育士として 1 年以上の面識があり，研究協力者のうち 1 名は，保護者の子の担任であった。面接は，筆頭筆者がインタビュアーとなり半構造的に，保育園内で個別に行った。インタビューに先立ち，保育観についてアンケートを実施した（表 1）。インタビューは，同意を得た上で IC レコーダーに録音し，得られた音声記録をすべて逐語記録に転記した上で，これを分析対象とした。逐語記録は，関わり方や考え方の内容ごとに区切り，各区分の内容を概念化し，凝縮した表現を付記して，これを「区分エッセンス」と名づけた。次いで，この区分エッセンスを内容の類似性に従って分類し，カテゴリを導き，各カテゴリに名称を与えた。そして，カテゴリを概念別にグループに整理した。またデータを分析していく中で，保育園全体を統括する園長（女性・保育士）の存在が保育の質に大きな影響を持つと感じ，追加でデータを得た。園長は他園に異動したため，電話インタビューを行った。

表 1　事前アンケートの項目

1. ご経歴について教えて下さい。 保育士歴（　　）年目　　今までの主な職場： 2. どのような思いで保育をしておられるのか教えて下さい。 3. 普段心がけておられること，大切にしておられることについて教えて下さい。 (1) 子どもに対して (2) 保護者に対して 4. 困難なことや倫理的ジレンマにぶつかった時の対処方法について教えて下さい。 (1) 過去に経験した具体的なエピソード (2) どのように対処されましたか 5. 今のご自身の保育観はどこで形成されたと思われますか？ どのようなご経験が今のお仕事に役立っていると考えられますか？ 6. 自己研鑽のために心がけておられることを教えて下さい。

3. 結　　果

インタビューは平均 52.4 分（48～59 分）であった。研究協力者は話しながら涙ぐみ，インタビュアーも話を聴きながら涙ぐむことがあるほど，お互いに感情の入り込んだ面接であった。文献などから借りてきた上面の言葉ではない，経験に裏打ちされた思いが言語的にも非言語的にも伝わってきた。保育行為の背景にある保育観が，当初想像していたものよりも深く緻密なものであることがわかり，保育士の思いに感銘を受け，筆者は改めて保育士のことを心から尊敬する機会となった。5 名の保育士と，大変貴重な時間を共有できたことを幸せに感じた面接であった。

カテゴリは，(1)【子どもに対する思いと関わり方】，(2)【保護者に対する思いと関わり方】，(3)【保育の質向上を支えるもの】の 3 つのグループに整理された。インタビューのアクチュアリティ[5]をあるがままに描き出すことも，本研究においてはエビデンスになると考えるため，以下，語りの生データ（「*斜め文字*」）を例に挙げ，保護者であるインタビュアーの感情をあえて交えながら，3 つのグループ毎に結果を示す。下線部分はカテゴリの名称であり，代表例を記した。全てのカテゴリの名称は，表 2-1 から表 4 に示した。

(1)【子どもに対する思いと関わり方】

1）子どもへの思い（表 2-1）

① 乳児期は人生の土台となる大切な時期であると認識し，子どもを心から尊敬し，子どもが大好きで，子どもと一緒にいることが幸せだと感じていた。

> *「しんどい状況のときでも，それを忘れて笑顔で楽しませてくれるって思ったときに，本当に尊敬したいっていう頭の思いとは別に，すごい心から子どもを尊敬できたんですね。（中略）子どもに救われてというか，助けられて今日まで仕*

事をしてこれたなっていう思いがあって」　（E 保育士 9 年目）

「ピアノもあかん，何やらもあかん（笑）。しゃべるのもあかん。じゃあ私どうすんのんって思ったんやけど，やっぱり子どもが好きで。大好きで。（中略）（やりがいは）子ども。子どもと一緒にいられること（笑）。だから本当に，ずっと子どもといたい。本当に子どもと，ギャッて楽しい時間をちょっとでも過ごせたら，すごくうれしい。大満足です。とっても浅くてすいません（笑）。」

（D 保育士 35 年目）

子どものことを「尊敬」するという語りを聴いた時に，すごく新鮮であったが，確かにそうだと思えた。そして，この思いが根底にあるかないかで，子どもへのまなざしや関わり方は大きく変わるだろうと感じた。また「子どもが大好き」ということを笑顔いっぱいに語られる様子から，本当に心の底から子どものことが好きなんだということがとても伝わってきて，温かく，有り難い気持ちになった。

②「自分っていいな」「大切にされている」「愛されている」と思ってほしい，自己肯定感を育んでほしいと思い，保育を行っていた。

「きっと乳幼児に限らず，人生のどこかで，自分がいいなって思える経験とか，愛されてる経験とか，そういうのがあると，すごく 1 本の支えになって，その人が生きていく力になるかなと思うので。」　（A 保育士 9 年目）

「自分を大事にしてもらったことで人にもちょっと優しくなれるというか，（中略）人にも，自分とおんなじようではないけれど，大事にできるっていうのは気持ちいいなって思ってもらえたら，うれしいですよね。人を大事にするっていうことも，自分と同じように，自分も大事にするっていうことと結びつくっていう。と，もっと平和な気がね。」　（B 保育士 20 年目）

「生きていく力」という言葉から，保育園での保育が「保護者が仕事をしている間に子どもを預かる場」ではなく，「生きていく力を育む場」と認識し，子どものことを一人の人として尊重し，尊敬し，プロ意識と責任感を持って保育していることがひしひしと伝わってきた。また，自分を大切にし，他者を大切にすることが，人が社会の一員として「共に生きる」ことの原点であることを再認識し，「平和」といシンプルな言葉に多くの思いが込められていると感じた。

表 2-1　子どもへの思い

●乳児期は人生の土台となる大切な時期である
●その土台が，子どもが大きくなった時に一番底辺で支える部分
●すぐには結果に出なくても，保育士の思いや関わりは必ず子どもに影響を与え心に貯まっている
●命を預かっているという責任の重さを感じている
●一人ひとり，その時その時に考えていることや気持ちがある
●子どもが主人公
●安心して，気持ちよく過ごしてほしい
●あたたかい雰囲気の中で育ってほしい
●「自分っていいな」「大切にされている」「愛されている」と思ってほしい。自己肯定感を育んでほしい
●自分の思いを気兼ねなく表出してほしい
●子どもを心から尊敬している
●子どもに教えられている。子どもは信頼でき裏切らない存在。
●子どもに教えるのではなく，子どもと一緒に学んでいきたい
●子どもと一緒にいて楽しい。幸せ
●子どもって本当にすてき
●子どもが大好き
●楽しく保育したい

2）子どもへの関わり方（表 2-2）

すべての保育士が，子どもを主体として受けとめ，子どもの心に目を向け，あるがままをまるごと受けとめることを大切だと感じていた。

> *「本当に子どもの心一人一人大事にするってことは，本当に必要やな，大切やなって思ってます。」*　（D 保育士 35 年目）
>
> *「小さいからといって気持ちがないわけではないし，一人一人，そのときそのときに考えていることとか気持ちとかがあるので，それを意識して，今どんな気持ちかな，今，何思ってこうしてるのかなって。子どもがどう思っているのか，子どもがどうしたいと思っているのかっていうのは，常に意識するようにしていて。」*　（A 保育士 9 年目）

5 人の保育士に共通して語られた，保育行為のベースとなる「子どもが主体」という意識は，A 保育園において，合言葉のようになっているとのことであった。「ひとりひとり」という言葉は語りの中で何度も聴かれ，集団としてみるのではなく，ひとりひとりの個別性を尊重し，ひとりひとりの心を大事にして下さっていることが伝わってきた。

表 2-2　子どもへの関わり方

●子どもを主体として受けとめる。寄り添う。
●子どもと気持ちを通い合わせようと，その子の気持ちをそばで汲み取る
●たくさんの言葉にならない思いを理解する
●一人ひとりと向き合う
●子どもの心に目を向ける
●子どもを大切にして，気持ちを込めて関わりたい
●子どものありのままを，あるがままをまるごと受けとめる
●自分らしく過ごせるように支える
●子ども同士が育ち合っていくために，大人が今できることは何かを考える

3）具体的な保育の方法（表 2-3）

① 子どもの立場になって想像し，大人主導にならず，子どもの気持ちに合わせて動いていた。そして，子どもの思いを共感して代弁すること，言葉で返すこと，一つ一つの行為の前に，子どもにわかるように声をかけることを徹底して行っていた。

> *「なるべく，こうしようねとか言うよりは，どういうふうに声かけたらその子が自分から行こうとするかなとか，そういう風なことを日々ちょっと考えながら一緒に遊んだりして。その子に合った，その子のモチベーションが上がるように。どんな声かけがその子にとって心地よいのかなって考えて」*（B 保育士 20 年目）
>
> *「やっぱり子どもが主人公っていうところは絶対譲れなくって，保育士主導でやってしまったほうがうまく進んだりとか，早かったりとかするし，クラスもがちゃがちゃしなかったりもするんですよ。でも子どもを大事にすると，子どもは自分を出すから，思いをみんながみんな出すとわーってなることもあるんやけど，やっぱり乳児っていうのは思い出してなんぼやって思うし，それを出して受け止めてもらって次に進めるのが乳児やと思うし」*（C 保育士 21 年目）
>
> *「こちらのすることすること一つ一つ子どもに伝えて，それから一緒にするっていう，徹底してはって，私も意識はあったんやけど，ばたばたするとこっちのペースでやっちゃったりっていうこともあったんやけども，それではあかんなって。（中略）そういうのをすごく自分も意識するようになった」*
>
> （C 保育士 21 年目）

「子どもが主人公っていうところは絶対に譲れなくって」の「絶対」という言葉に強い決意が込められているように感じた。

② 非言語的なメッセージも駆使し，スキンシップも大事にし，温かい雰囲気を伝え，安心できる空気感を出すことを心がけていた。

> *「なかなかこう集団の中で，保育士の数も限られてるので，すぐにみんなの気持ちを理解して，あっ，今あの子のそういう気持ちがわかって行ってあげたいと思っても，すぐに行けないときとかもあるので。でもそういうときは視線で送って，ちょっと目が合ったら，うんってうなずいたりとか，にっこり笑ったりとか。そういうのも，とか，身振りだったりとか。」*（E 保育士 9 年目）
>
> *「やっぱ安心して過ごせるっていうことが一番大事かなと思ってるし，そのときに自分がどうかかわったらいいのかっていうか，その子にどういう言葉をかけ*

たらいいとか，どういう表情で。さわるにしても，どういうさわり方がいいって，体のふれ方がいいかとか。何かとっても無意識だと思うんですけど。（中略）思いがあっても，ちょっと困った顔してると，多分，子どもってわかるやろうし。大丈夫だよって言っても，本当に目線合わせて，一緒に遊ぼうよ，大丈夫だよって，何かそういうようなとこら辺が大事なんかなって，すごく思ってます。」

（D 保育士 35 年目）

5 名の熟練保育士が上記のようなことを言葉だけでなく，日々の保育の中で自然に実践しておられるので，筆者を含めた複数の保護者が「丁寧な保育をして下さっている」と実感し，安心して子どもを預けられるのだと再認識した。

4）【子どもに対する思いと関わり方】のまとめ

【子どもに対する思いと関わり方】をまとめると，以下の語りに集約される。

「いろんな保育のやり方があるけど，何を大事にして保育しているんかっていうのは，大事なことなんかなっていうふうに思ってます。まあ手順とかいろいろあるけど，その手順どおりいかなくてもいいやんっていうことが。やっぱり人間なのでね，多いと思うので。大事な基本とかそういう手順っていうのは，知っとくことはとっても必要やし，私らもプロですから押さえとかなあかんとは思うんですけど，そうじゃないことっていっぱいあるし，そこでどういう思いでそうするのかっていうのが，ちゃんと自分の中で消化できて，仲間と共有できてたらいいのかなっていうふうに思います。」

（D 保育士 35 年目）

すなわち，何を大事にして保育するかを認識し，仲間で共有することが大事だということは，筆者も対人援助職のひとりとして大変共感でき，確かにそうだと思い，感じ入った。

表 2-3　具体的な保育の内容

- 言葉にならない思いを感じて理解する
- 子どもの立場になって想像する
- 大人主導にならず，子どもの気持ちに合わせて動く
- 子どもの気持ちが動くのを待つ
- 保育士の気持ちが出そうになるのを意識して抑える
- 一つ一つの行為の前に，子どもにわかるように声をかける
- 子どもの思いを共感して代弁する
- 言葉で返す
- スキンシップを大事にする
- アイコンタクトや身振りで気持ちを伝える
- 笑顔で接する
- 温かい雰囲気を伝える
- 安心できる空気感を出す
- 行為よりも気持ちの育ちを大事にした言葉がけをする
- 何を大事にして保育するかを認識し，仲間で共有する

(2)【保護者に対する思いと関わり方】

1）保護者への思い（表 3-1）

ここでも，保護者を主体として受けとめる，しんどさを受けとめる，といったように，相手（保護者）を「主体」としてみていることが明らかになった。また，一緒に考えたい，色んな事を保護者と共有して一緒に子育てを楽しみたいというように，「一緒に」というスタンスでいることが印象的であった。そして，最終的には，保護者が自分で答えを出せるようにすることが一番の支援と考えていた。

表 3-1　保護者への思い

- 保護者を主体として受けとめる，しんどさを受けとめる
- 心から安心して預けて頂けるような場でありたい
- 色んな事を保護者と共有して一緒に子育てを楽しみたい
- 一緒に考えたい
- しんどいときに保護者が 1 人で抱え込まないように，誰かに相談できるようになってほしい
- 保護者が主体的に子育てに向かえるようにサポートしたい
- 保護者が自分で答えを出せるようにすることが一番の支援
- 子どもの思いを代弁する

2）保護者と関わる時の具体的な方法（表 3-2）

① 保護者の気持ちを感じ，話や相談をしてもらいやすいように，表情や言葉がけなどを意識し，送迎時のコミュニケーションを大切にしていた。

> *「お迎え来たときのお母さんの表情とか，朝のお母さんの表情とかもすごい気になってて，一番は子どもさん見て，その次はお母さん見るんですけど，お母さん疲れてるなとか，そんなんはやっぱり感じると，気になるというか。でも『疲れてますか』みたいな感じで聞けないので，ちょっと会話の糸口違うところら辺で，『昨日元気にしてはりましたか』みたいな感じから入っていってみたいな。」*
>
> （C 保育士 21 年目）
>
> *「どうでもいい話をよく，お母さんとかにはするようにして，どうでもいいってたら悪いんですけど，そんな核心に迫る子どもの育ちとかそんなんじゃなくて，今日こんなことして遊んではって，こんなかわいかったよって。とか，『こういうふうに私がしゃべったらこういうふうに返してくれはってね』って言って，『面白いね』とか言って，一緒に笑い合うっていうのがやっぱり自分も子育てしてて，迎えにいったときに，それしてもらえたときと，何もなかったときでは，その帰ってからも違ったし。その一瞬が大事やろうなと思って。（中略）何気ないその子との日常みたいなのを，かわいい姿を伝えるっていうのは大事やなと。」*
>
> （C 保育士 21 年目）

「（朝掃除しながら）保護者とも顔合わせたりするじゃないですか。そこでちょっと言葉交わせたりとか，そういうことはすごく大事やなと思てるので。（中略）やっぱり顔合わせるっていうことと声かけるっていうのは，大事かなと思ってて。子どもさんでもそうですし。貴重やなっていうふうに思ってるんです，その時間。」　（D 保育士 35 年目）

「その一瞬が大事」という言葉や「貴重」という言葉が印象的であり，特に保護者としてこれらの語りを聴いた時は，有り難さから感情がこみ上げた。筆者は，担任ではない管理職の先生との朝の一言の挨拶にも元気をもらっているので，その時間を「貴重」だと思って下さっていたことに感激した。

② 送迎時には，子どもを愛おしく感じてもらえるよう，保護者が笑顔になるようなエピソードを話すことを心がけ，ただ日中何があったかの情報伝達だけでなく，保護者の気持ちを考慮してコミュニケーションを意識的にして下さっていることにも感銘を受けた。

表 3-2　保護者と関わる時の具体的な方法

- 保護者の気持ちを感じる
- 固定観念で考えず，柔軟に対応する
- 話や相談をしてもらいやすいように，表情や言葉がけなど意識する
- 見てますよ，気にしてますよというメッセージを送る
- 送迎時のコミュニケーションを大切にする
- 子どもを愛おしく感じてもらえるよう，保護者が笑顔になるようなエピソードを話す
- 保護者を認め，肯定的に話を聞く
- 保護者の思いを傾聴する，理解する
- 自分が母親だったらどういう言い方をされたらいいかを考える
- 言いにくいことは，タイミングや言い方に気をつけて“うまいこと”言う

3）連絡ノートについて（表 3-3）

A 保育園では，一週間に A4 用紙 1 枚の連絡ノートを使っており，食事内容や睡眠時間，排泄記録と，家庭での様子，園での様子を数行ずつ書く欄がある。

保育士の子どもに対する思いの深さがノートでも保護者に伝わるとの思いで書き，子どもが大人になった時に見て，何かの力になるようにと意識して書いていた。また，保護者が嬉しくなるようなこと，子どもが書いてほしいと思っていることを書くことを心がけていた。

「できるだけ情景が浮かぶように，その場にいなくてもイメージができるようにっていうことと，やっぱり基本的なことですけど，やっぱりいいこと，お母さんが読んでふっと笑ったりとか，うれしくなったりとかすることを書きたいなと思ってるし，子どももきっと書いてほしいだろうなと思ってるようなことを書き

たいなと思ってます。」　（E 保育士 9 年目）

「せっかく書くからには，いろんな人にとってしあわせだなって思うようなものになったらいいかなと思います」　（A 保育士 9 年目）

筆者は，子どもを迎えに行った時に保育士と話せたとしても，園での様子欄の記述を楽しみにしている。文字として残ることで，父親も保育園での子どもの様子を知ることができ，子どもを交えて話題にできる。また，微笑ましいエピソードは，何度も読み直して癒され，元気をもらえる。過去の記録を読み返すことで，改めて子どもの成長に気づかされ，今は今しかないので，今を大切にしなければならないとの思いを再確認するのである。また，子どもの成長記録として，子どもが成人した時に渡せるように大切に保管しておきたいと考えている。このような思いを持っていたので，ノートの記録一つにしても，ここまでの思いを持って書いて下さっていることに感銘を受けた。

表 3-3　連絡ノートについて

- 子どもの行動よりも「心の動き」を描く
- 行動の記述だけで終わらないように，その時にどんな気持ちでそれをしていたのかがイメージしやすいように，保育士がどう感じたかを書いている
- 子どもが大人になった時に見て，何かの力になるようにと意識して書いている
- 場面が手に取るように，情景がイメージできるように書く
- 悪いことだけで終わらないように書く
- 幸せを感じられるようなものになるように意識している
- 保護者が嬉しくなるようなこと，子どもが書いてほしいと思っていることを書く
- 保育士がどんな気持ちで関わっているかを書く
- 保育士の子どもに対する思いの深さがノートでも保護者に伝わると思っている
- 保護者は連絡ノートを楽しみにしていると思うし，お父さんもノートを通じて子どもの姿がわかる

4）クラスだより，園だよりについて（表 3-4）

A 保育園では，定期的にクラスだよりと園だよりが保護者に配布されている。

クラスだよりにおいては，筆者も薄々感じてはいたが，子どもの写真が平等になるように意識するといった，細やかな配慮がなされていた。またお知らせ（情報）よりも，保育として大事に思っていることを書く，保護者がほっとできるように，子どもに目を向けるきっかけが提供できるようにといった思いから作成されていることが明らかになった。加えて，保護者の発達に関する悩みが軽減するような情報を書く，というように，ここでも保護者のサポートが意識されていた。

「発達のことって，ポンと情報だけ入ってくると，何歳には何々ができるらしいよみたいな，そういう情報でしか保護者には入ってこないことが多いから，その背景には何があるのかっていうのを丁寧にわかりやすい言葉で書くことで，お

母さんの負担が減るんじゃないかなって思うので，そこも大事にしていきたいなって思ってます。」　（E保育士9年目）

園長が異動前の園だよりの中には，その月の行事予定だけでなく「こどもってすてき」という，保育の中でのちょっとした子どもの素敵なエピソードを伝えるコーナーがあった。筆者は毎月そのコーナーを楽しみにしていた。園長に，そのコーナーの目的を尋ねると，*「子どもの表情や仕草に目を向けないといけないと思っていて。子どもの素敵な姿がこれからにもつながっているし，みんなにも見つけてほしくて。お母さんたちにも，うちにもこんなことあったよなぁって目を向けて下さるように。」書いていたとのことであった。*園だよりにおいても，情報伝達だけでなく，保護者のサポートが意識されていた。

表3-4　クラスだより，園だよりについて

- お知らせ（情報）よりも，保育として大事に思っていることを書く
- 子どものすてきなところを伝えたい，共有したい
- 保護者がほっとできるように，子どもに目を向けるきっかけが提供できるように
- 子どもの写真が平等になるように意識している
- 保護者の発達に関する悩みが軽減するような情報を書く

(3)【保育の質向上を支えるもの】（表4）

保育の質向上を支えるものを整理すると，〈保育士の意志や人間性，人生経験といった内部因子〉，〈研修などの外部因子〉，〈職場でお互いを尊重する仲間意識〉の3つになった。

1）保育士の意志や人間性，人生経験といった内部因子

① 保育士自身が家族から愛されて大切に育てられた経験が，子どもの自己肯定感を育むことは善いことであるという確信につながっていた。

「自分も大事に，その大事にしてもらったことを返していきたいっていう思いがあるので。（中略）私はすごく大切に，自分の思いを大事にしてもらって育ててもらってきたなあって思います。」　（E保育士9年目）

「父親がすごく私を言葉でほめて育ててくれていて。いい子やなとか，頑張ってるなとかって，常に，言葉にしてくれていて。それが今，私すごく自分の自己肯定感を育ててもらって，自信持って生きていくっていうことにつながってるのかなと思うので。それを私も保育所の子どもであれ，もし将来，自分が子育てするんだったら，そういうところって大事にしていきたいなと思っていて。」

（A保育士9年目）

表４　保育の質向上を支えるもの

〈保育士の意志や人間性，人生経験といった内部因子〉
●子どものために，保護者のために仕事がしたいという思い
●貢献感，やりがい
●他者から学ぼうとする謙虚さ
●考え方の違いがあるから考えが深まっていくという認識
●色んな可能性を考える
●柔軟性をもつ
●人間性が仕事に直結するので，人間性を深めたいという思い
●人間関係を幅広く持つことが自己研鑽につながる
●自身が家族から愛されて大切に育てられた経験
●恩師の影響
●自身の子育て経験
〈研修などの外部因子〉
●鯨岡峻先生の研修
●経験年数別の研修システム
●お互いの保育を振り返る（同僚の保育を見る，ノートを読みあいっこ，エピソード討議）
●エピソード記述により，自分の保育を振り返り，子どもと普段以上に向き合うきっかけになる
●本や新聞から知識を得る
●学生時代に出会った詩（ドロシー・ロー・ノルト『子は親の鏡』）が，今でも子どもと接する時の指標になっている
●保育に偏らず，幅広く研修を受ける
〈職場でお互いを尊重する仲間意識〉
●横のつながりを大事にして，みんなで考える
●一緒に考える
●色んな思いを伝えあう
●積極的に他者に相談する
●人と話すことで自分の中でも整理がつく
●経験年数や上下関係なく，お互いを尊重する雰囲気。語り合える，支え合える関係づくり

先生方がご両親に愛されて育ってこられたことがとても伝わってきて，感動して涙が出た。そして，実感を伴って，子どもの自己肯定感を育む保育をして下さっているから，あの子どもへのまなざしと関わり方ができるのだと心から理解できた。また，*「母親や父親でなくても，周りの大人から愛情を受けるという方法もある。そういう愛情を受けたことが，前向いていこうという気持ちにさせてくれる」*といった語りも印象的であり，そのような立場でありたいと思いながら日々保育されていることが伝わってきた。

② 他者から学ぼうとする謙虚さや，考え方の違いがあるから考えが深まっていくという認識をもち，色んな可能性を考えて，柔軟性を持つことを心がけていた。

> *「自分の物差しがあるし，人にもまた別の物差しがあるし，いろんな思いがあっていいとは思うので，自分の思いを押し付けたりしないことが一番だと思うので。そういう訓練はまだ私にはたくさん必要だと思うんです。自分の固定観念で考えてしまわないというのは，すごくそういう意味では，保育士っていうのは*

柔軟に，頭柔らかく対応しないといけないのかなって思うんですけど，まだまだと，自分では」　（B 保育士 20 年目）

その謙虚さや柔軟性が，他者に開き，他者と関わり合う中で，より良い保育を生みだす因子となっていた。

また，この謙虚さは，他の保育士に学んでほしいことの伝え方にも影響していた。

「（他の保育士が書いた）連絡ノートをちょっとあれ？って思ったところもあったりして，ちょっと担任の先生がお休みやったときとかは，ちょっと書かせてくださいっていって書かせてもらったりとかして，そうしたら引き継ぎの先生とかも，それを読まはるじゃないですか。ちょっとずつ内容が変わってくれはって，『すごい先生のノート変わりましたね，4 月のときと比べて変わりましたね』とかって言ったら，先生のノート見本にしてとかって言ってくれはって，そういう伝え方もあるんやなと思って，指摘になったらやっぱりあかんやけど，自分が書いたものを見て，ああいいなと思ってもらって，次，変わっていってくれるっていうのが一番うれしいし，そういうのが私らしいかなと思うので」

（C 保育士 21 年目）

後進を指導する立場にある者にも謙虚さがあるからこそ，学ぶ側も前向きに気持ちよく学ぶことができることがわかり，心が温かくなった。

2）研修などの外部因子

A 保育園のある X 市では，経験年数別の研修が行われており，鯨岡峻先生が講師となり，エピソード記述（注 1）に関する研修が重点的に行われていた。エピソード記述により，自分の保育を振り返り，子どもと普段以上に向き合うきっかけになることが明らかになった。

「すごく書くのがすごくしんどいんです，みんな。なんですけど，やっぱり一番自分がどういうふうに保育，どういうふうに子どもと向き合って保育してきたかっていうのがわかりやすいんですねよね，いいことも悪いことも。だからそういうので，いろんな学びを今まで，この保育所でもほかの保育所でもそうですし，してきました。」　（B 保育士 20 年目）

「すごくプレッシャーなんだけど，心を受け止めるっていうスタンスで書く。（中略）漠然と保育してたらそういうことは書けないので，もう特にそのエピソード書いたときとかは，今までにないぐらい敏感になるというか。（中略）心

を受け止めるっていうことをもっと流してしまわずに実践していくっていうか，でもそれがあってその以降の年も，子どもの見方とか受け止め方が変わったと思うので，自分としては。（中略）最初は何？っていう感じやったんですけど，やってみたらすごく子ども見る見方が深くなったと思うのでよかったと思いました。」

（C 保育士 21 年目）

同じ研修を受けることで，共通言語・認識を持って，同じ方向性を持って保育ができるということ，またエピソード記述を行うことが子どもの見方を深めることに繋がり，保育士の成長に大きく寄与していることがわかった。また，研修会だけでなく，講師がいなくても保育園でそれぞれの保育士がエピソードを書き，みんなで討議し学んでいこう，お互い高め合っていこうとする動きがあり，保育園にしっかりと定着していた。

3）職場でお互いを尊重する仲間意識

経験年数や上下関係なく，お互いを尊重する雰囲気・語り合える，支え合える関係づくりは，保育士自身が大切にされる経験となり，子どもを大切にでき，チームワークも向上するという結果になっていた。保育の質向上を支える，とても大切な概念であるため，長くなるが，複数の研究協力者の言葉を引用する。

「上から下りてくるだけじゃなくて，みんなが対等として話せる場っていうのが，きっといい保育を作っていくんだろうなっていうふうに感じられるようになってきて。（中略）みんな対等に，保育の場ではみんなが相手の気持ちっていうか，動きを思いやりながらフォローしたりとか，若いとか関係なくできたら，きっといい保育になっていくんだろうなっていうふうに思って。」

（B 保育士 20 年目）

「言ったこと絶対否定しいひんみたいな雰囲気もあったので，何言ってもOKっていう。（中略）何言ってもいいし，新人さんの言うことにみんな，おお，みたいな。すごいところ気づいたねみたいな雰囲気もあって。すごく温かかったです。本当に孤立してなくて，困ったときに声かけてもらったり，私も声かけたりとか，そういうのが自然にできるし，あそこのクラス大変やなって思ったら，こっちのクラスも自然に応援いけたりとか，休憩室も子どもの話とか，こんなかわいかったんやみたいな話とか，ちょっと誰々ちゃん最近しんどそうやなみたいな話とか，休憩中も子どもの話してたりしてたので，1 人がしんどくならんように，しんどい人には助けを出すというのはみんなの中で浸透してたと思いますね。やっぱりそれないと，保育士って大変やし。人間相手の仕事なのでいろんな感情

持ちますしね。落ち込むときもいっぱいあるし，うまくいかへん，うまくいった，いろんな感情あるし，それをこう，聞いてもらったり，若い人も聞いてもらうし，私らも聞いてもらうし，こんなんで失敗したんやっていう話もするし，それで仲間で仕事してるっていう気持ちがあると，1 人で仕事してるんじゃなくて，仲間っていう気持ちはあったので，私も年が上のほうやけど，若い先生にも相談乗ってもらうし，その逆もあるし，そんな雰囲気はあると思います。」

（C 保育士 21 年目）

「常に上司とかも，管理とかじゃなくって，一緒に保育してくれてるっていうスタンスやったし，見て学ぶところもすごくあったし，困ったら相談できるっていう上司やったし，困ってる人いたら助けなあかんやんみたいなのはありましたね。みんな同じようにはできなかったりもするし，できひんところは補うみたいなそういう空気はありましたね。」（C 保育士 21 年目）

「『先生 1 人ちゃうしな。大丈夫やで』って言って声かけるようにはして。『1 人で保育してんのちゃうよ』って言うて。それは伝えるようにしてます。（中略）具体的にもっといろんなことで助けなあかんやろうけど。そんなことしか言えなくて。（中略）気持ちのよりどころっていうか，安心できるそんな状態，やっぱ大事やなって思うしね。不安なったら仕事できないですよね，やっぱり」

（D 保育士 35 年目）

これらの語りを聴いた時に，このチームで筆者自身も働くことができればとてもやりがいがあり，“業務”に流されず，“援助”という仕事ができるだろうと羨ましく思う程であった。そして，お互いを気遣うこの姿勢こそが相手を主体として尊重するベースとなり，子どもを主体として受けとめる保育につながるのだと確信した。

園長は，*「（保育士は）それぞれキャリアをお持ちで，力も持っておられるので，一人ひとりが力を発揮できるように，しんどくならないように」「どんな風にしていきたいか思いを聞いて，みんなで決めていく」*ことを心がけていた。*「何か問題が起きた時も，一人の先生のせいにするのではなく，ヒューマンエラーは必ず起こるものなので，エラーは受けとめて，みんなで原因を話しあったり，ヒヤリハット報告書の内容から統計をとり，対策を立てる」*ことや，休憩室に報告書を置いて共有することを心がけていた。園長が「みんなで」という意識を持っていること，そして「力を持っておられる」と敬語を使っていたことから，部下のことを尊重していることが伝わり，現場の保育士はのびのびと仕事ができるように感じた。管理者として，“管理”するというよりも，「一人ひとりが力を発揮できるように」サポートしていることが印象的であり，保育士のよきモデルとなっていたことが伺えた。

4. 考　　察

村瀬[6]が，「質のいい戦略というものは，日頃からの勉強の蓄積が必要で，ひょいとした一元的なもの，何かただ出てくるものでは絶対にない」と述べるように，本研究の研究協力者においても，長年の日頃の研鑽が，今の保育観を形成し，丁寧な保育に繋がっていた。すなわちこの丁寧な保育とは，質の高い保育といえる。

(1) 対象者の主体性を大事にする

鯨岡[7]は，子どもが主体として生きるのを援助することが自分の役目なのだと考えるような柔軟な子ども観が必要だと述べている。今回の全ての研究協力者は，表現を変えながらも何度も「相手が主体」ということを語っていた。A 保育園では「子どもの権利を保育に活かそう」という，子どもへの関わり方のチェックリストを用いて，関わり方の振り返りをしている。その一番目が「子どもであっても一人の人間として尊重しようと思っている」である。この基本理念が，しっかりと保育士の心に根付いているからこそ，インタビューでも自然に語られ，保育にも活かされているといえる。また職種は異なるが，熟練作業療法士を対象としたインタビュー研究[8]においても，「対象者の主体性を大事にする」という概念が得られたが，これは職種を問わず，対人援助職全てにおいて大切な概念だといえる。

また，本研究で得られた，子どもへの思いや関わり方は，認知症ケアの理念である，パーソン・センタード・ケアと類似していた。Tom Kitwood[9]は認知症を持つ人のパーソンフッドを維持する働きかけを 17 種類挙げているが，その中の「尊敬すること」「尊重すること」「共感をもってわかろうとすること」などは，今回の語りから得られた概念と共通する。対人援助者は，相手が子どもであれ，大人であれ，認知症を持つ高齢者であれ，相手を主体として受けとめ，尊重することが何よりも大切であることを再確認した。そして，これは対人援助職の援助の核となるといえる。

(2) エピソード記述の意味

今回の研究により，エピソード記述が　保育の質向上を支える因子の一つであることが明らかになった。岡花ら[10]は，「エピソード記述」を用いたカンファレンスだからこそ，保育の枠組みや子ども観という深い側面まで踏み込んだ議論ができ，同僚保育者の保育観や子ども観を垣間みたり，自分のそれをつきあわせる機会は，保育目標や方向性を確認するうえで重要なことであり，保育者同士の協働は「保育の質」そのものの向上につながるとしている。鯨岡[5]は，エピソード記述は子どもの理解に繋がり，またそこに自分が関わっていることの意味の確認に繋がるとしている。また，全国的にエピソード記述を学ぼうとする動きが保育者のあいだに起こっている理由として，エピソードを描く→皆で検討する→いろいろな気づきを得る→職員が

まとまる→保育に向かう力が湧く，といった好ましい流れが実際に生まれることが理解されてきたからではないかと述べ，それが保育の質の向上に繋がっていく[11]としている。本研究を行い，エピソード記述はよりよい保育を検討するための方法という意味を超えて，自分の援助の「意味」を確認することになり，援助者の自己肯定に繋がるのではないかと考えた。

(3) 保育観を考え，共有することの大切さ

子どもに対する思いと関わり方で得られた，何を大事にして保育するかを認識し，仲間で共有することが大事であるという概念は，すなわち保育観の共有である。これは，諏訪[2]のいう「保育の質」概念の中軸となる「保育者意識」である。語りの中で「仲間」という言葉で語られたように，職員は「仲間」であると自然に認識できていることが，A 保育園の質の高さを物語っているといえる。赤木[12]は，自閉症児教育の本の中で，「自閉症の子どもをどのように理解するか」「何を大事にして教えるか」といった，大きな障害観・教育観を考えることの大切さを述べ，様々な現場において，それぞれの教師の「子ども観」や「障害観」が如実に反映され，それぞれの考えが意識的・無意識的に関わりに反映されていると述べている。関わり方を知識として会得するだけでなく，そのベースとなる相手への思いを熟考し，仲間と共有することで，パターンにはまらない，臨機応変な援助ができると考える。

(4) 援助者がお互いを援助しあう「援助者の援助」

面接で語られた，保育士達が同僚とより良い保育を目指す様子は，村田[13]の提唱する「援助者の援助」を想起させる。村田[13]は「援助者の援助」が存在していないこの現状は燃え尽き症候群や離職の増大という現実的な問題をつきつけ，援助者としての成長を援助されることなく「業務」に追われる援助職は，意欲ある職員ほど燃え尽きるか苦しみつつその職場を離れる傾向にあると述べている。対人援助専門職の育成と成長を促すことを通して，利用者へのサービスの質の向上をめざすものであるならば，その目的を実現する最初の段階として「援助者の援助」である支持的スーパービジョンが存在しなければならないとしている。大宮[14]は，イギリスの保育園研究を例に出し，保育者－子ども関係が肯定的な保育園と否定的な保育園を分かつ決定的な要因の一つが，保育園における職員同士の人間関係の民主主義であるとしている。大人同士の民主的なかかわりは，子どもとの関係に反映され，プライドを有した独立した人間として子どもに向き合い，子どもに肯定的な見方でかかわっていくと述べている。また，保育の安定性（保育者の離職率の低さと子どもにとっての保育の場・形態の変化の少なさ）が，全般的な保育の質のよさに関連する[14]と述べているが，これは保育士がお互いを援助しあい，やりがいをもって保育の仕事を楽しめる環境がいかに大切であるかを物語っている。

アドラー心理学では，あらゆる対人関係は対等の横の関係であるべきと説き，岸見[15]は，対等の横の関係になって初めて援助し，協力し，勇気づけることが可能であると述べている。語

りでの「上下関係なく」という言葉は，A 保育園において，自然と横の関係が築かれており，共に協力し合って保育園全体の保育の質を高める努力をしてきたことを物語っている。またそのことが，自然とお互いを援助する「援助者の援助」につながり，やりがいを持って保育の仕事を楽しむことができていたのではないだろうか。経験年数に関係なく，お互いの子どもの見方に自分の身を置きながら，お互いの立場を共感的に理解し，それぞれが自分の保育を丁寧に捉え直し再構築していくことが，それぞれの保育者の専門性の向上に繋がっていく[16]といわれているが，まさしく A 保育園における保育士の姿を表しているといえる。

(5)「当たり前」に見えることに込められた大切なこと

鯨岡[5]は，私たちの平凡な日常を支えているものは「当たり前のもの」の数々であり，その「当たり前のもの」はまさに「当たり前」であるがゆえに，大切なものとしては意識されないとしている。しかし，保育園に子どもを預ける保護者として，保育士の先生方の「当たり前」の言動のなかには，多くの深い思いが込められていること，そしてそれらがさりげなく行われるがゆえに，その素晴らしさは「当たり前」のものになってしまうことを実感した。

今回，保育士の先生方にインタビューさせて頂き，一つ一つの言動にこめられた思いと背景を知り，保護者として感動した。紙面の関係上，代表的な語りしか掲載できなかったことが残念である。例えば，筆者の子の担任が，「えらい」や「かしこい」といった言葉を使われないと感じていたので，その理由を尋ねると*「使いたくないというか，言いたいともあまり思わない。かしこいやえらいって，上から目線で，子どもに対する尊敬があまりない気がします。親子やったら気持ちさえこもってれば愛情が伝わると思うんですけど，やっぱり親子ではないので，言葉がけひとつも，そう思うと意識して言っているのかなと思います。」*と答えられ，子どもへの思いとプロ意識の高さに圧倒される思いであった。

援助者が，「当たり前」の素晴らしさに自覚的になり，無意識に行っていることを意識的に行い，また後進に伝えていくためにも，援助の意味を確認する意味でも，自身の援助や対象者への思い（保育観や障害観，援助観）を語り合うことが重要といえる。その一つの方法として，エピソード記述の利用による援助の省察が有効に機能すると考える。

また研究協力者から，今回のインタビューが「保育を振り返る貴重な経験」になり，「勇気を得た」「前を向くことができた」との声を頂いたことから，保育観について保護者と対話することが，保育の質を高める方法の一つになるかもしれないと考える。

5. ま　と　め

対人援助職は，相手の立場で想像し，相手を尊重し，受けとめ，その時その場，一瞬一瞬を大切にし，丁寧に関わることが大切であること，そして，チームがその思いを共有し，尊重し

合い支え合い，共に成長することが大切であることを，研究協力者の語りから学ばせて頂いた。

本研究を通して，援助の「質」を構成するものを，実践者の声から明らかにし，「当たり前」に行われているようにみえる援助の中身と意味を問い続ける必要性を感じた。当事者の声から「大切なこと」を明らかにしていくことに意義があり，その声を反映した制度や政策が望まれる。

児童精神科医である傳田[6]は，対人援助者には職種や領域が異なっても共通する本質があり，優れた対人援助の本質として，理論や技法だけでなく，援助職者のもつ資質や人間性も大切であるとしている。人が人を援助するときに，何を大切にしなければならないのかをこれからも追及していきたい。

［謝辞］

本研究に協力して下さいました保育士の皆様に深く感謝いたします。

［注］

1）　エピソード記述とは，保育で言えば，保育者の心が揺さぶられた場面での子どもと保育者の密なる関わりの機微，心と心の触れ合いをあるがままに描くものである。保育者が子どもの気持ちをどのように受けとめて，どのように返し，どのように影響したのかを描くため，鯨岡[12]は「自らの保育実践を丸裸にする一面を持つ」としている。

［文献］

1）　林　悠子：保育の「質」として語られてきたこと．佛教大学社会福祉学部論集 10：49-65, 2014.
2）　金田利子・諏訪きぬ・土方弘子：「保育の質」の探求 ――「保育者－子ども関係」を基軸として．ミネルヴァ書房，2000.
3）　鈴木文代：保育の質向上に関わる実証的研究 ―― 子どもの気持に沿える言葉かけの意識化を図る ――．愛知教育大学幼児教育研究 14：35-43, 2009.
4）　秋田喜代美・佐川早季子：保育の質に関する縦断研究．東京大学大学院教育学研究科紀要．51：217-234, 2011.
5）　鯨岡峻：エピソード記述入門　実践と質的研究のために．東京大学出版会，2005.
6）　村瀬嘉代子・傳田健三編：対人援助者の条件　クライエントを支えていくということ．金剛出版，2011.
7）　鯨岡　峻：母と子のこころをつなぐコミュニケーション．作業療法 25(6)：478-481, 2006.
8）　白井はる奈・白井壯一・宮口英樹：重度認知症高齢者に対する熟練作業療法士の介入ストラテジーに関する探索的研究．作業療法 30(1)：52-61, 2011.
9）　ドーン・ブルッカー著・水野裕監修：VIPS ですすめるパーソン・センタード・ケア．クリエイツかもがわ，2010.
10）　岡花祈一郎他：「エピソード記述」を用いた保育カンファレンスに関する研究．広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要．38：131-136, 2010.
11）　赤木和重・佐藤比呂二：ホントのねがいをつかむ　自閉症児を育む教育実践．全国障害者問題研

究会出版部，2009.
12）鯨岡　峻・鯨岡和子：保育のためのエピソード記述入門．ミネルヴァ書房，2007.
13）村田久行：援助者の援助　支持的スーパービジョンの理論と実際．川島書店，2010.
14）大宮勇雄：保育の質を高める　21 世紀の保育観・保育条件・専門性．ひとなる書房，2006.
15）岸見一郎：アドラー心理学入門　よりよい人間関係のために．KK ベストセラーズ，2001.
16）佐伯　胖：共感　育ち合う保育の中で．ミネルヴァ書房，2007.

（しらい　はるな　作業療法学科）
（はやし　ゆうこ　社会福祉学科）
2014 年 10 月 30 日受理